



外来診療ドリル 診断&マネジメント力を鍛える 200問

松村真司, 矢吹 拓 編

●B5・頁212 2016年4月

定価：本体4,200円＋税

[ISBN978-4-260-02505-8]医学書院刊

桜が咲き始めた春の頃、本書はついに僕の手元に届いた。手に取ると同時に目に飛び込んできた「目指せ！『外来偏差値』65!!」のキャッチコピーになぜだか少し胸が躍る。100症例200問か、ならば毎日3症例6問ずつ解いて1カ月と少しで終わらせることができる。あの日、確かに僕はそう思ったんだ。

鉛筆で解いて右上のチェックボックスに○×を付けて後で集計する。滑り出しはすこぶる好調で○が並んだ。「も、もしかして高偏差値をたたき出せるのでは!？」……傲慢な思いが脳裏をかすめる。しかし考えが甘かったことにすぐに気付く。片頭痛によるアロディニア、低髄液圧症候群の治療法、月経前症候群(PMS: premenstrual syndrome)、PPI(proton pump inhibitor)以外の microscopic colitis……どうやら知識の整理ができていないようだ。これまでも見逃しがあったに違いない。生命には直結しないもののQOLを下げ続け得るような疾患については、ぜひともしっかり整理しておきたいのだ。だって、よくわからずにずっと対症療法し続けるなんてとても悲しい。今日ここでしっかり勉強して、明日はきっと見逃さない。そう僕は誓った。

その一方で、問題を解いた前後に一過性全健忘、レム睡眠行動障害、安静で下肢痛が悪化する末梢動脈疾患(PAD: peripheral arterial disease)の患者さんにも出会う。「あなたの外来を訪れるかもしれない100症例」……帯の言葉になるほどと頷く。これまでも幾度となくこういったことはある。日常的に学び準備していた者にのみ微笑む診断の神はいるのだ。これは、静かにビッグウェーブを待ち続け、訪れたと共に華麗に波乗りしてみせるサーファーの感覚と近い。でも僕はサーフィンをしないのでその感覚はあまりよくわからな

いんだ。何にせよ、そう、僕らは一生勉強なんだ。

ところどころの選択肢・解説には魂が込められている。「ここはぜひシェアしておきたい」という筆者の思いが伝わる。良性発作性頭位めまい症(BPPV: benign paroxysmal positional vertigo)は「典型的な症例のみをBPPVと診断する」が鉄則、のフレーズに胸が熱くなる(p.184)。診断だけでなくマネジメントについても、非常にcommonなもののから比較的rareなもので触れられている。rareなものといっても確かに出合うし、commonなものについては曖昧になりがちな部分についても限られたページの中で見事に掘り下げられている。あまり話題にならないけれど実地臨床では常に遭遇する問題も扱っている。長らくの難聴の原因が耳垢塞栓だったという高齢者がたまにおられるが、耳垢除去後に聞こえが良くなり感謝されるのは、ちょっとしたことかもしれないがうれしいことである。

毎日3症例6問ずつ解けば、1カ月と少しで終わらせることができる。あの日、確かに僕はそう思ったんだ。でもちょっと挫けそうなきももあった。そんなときには良い方法がある。みんなで集まったときに1症例だけ一緒に解いてみるのだ。うちのクリニックだとナースとともに毎朝5分間勉強会をしている。この時にどさくさに紛れて1症例みんなで解いてみれば、一石二鳥なのである。

最終的に200問中132問正解。結局、僕の外来偏差値はいくつなんだ、というのは少々気になるところではあるが、こんなに質の高いテキスト(和製MKSAPといっても過言ではない)を楽しみながら解いて外来診療スキルが上がるだなんて、こんな贅沢な話はない。そう、僕らは一生勉強なのだから。